

もうきふぼく
盲亀浮木

椎名 利(化工会)

(一)

伊豆の中央を貫け、天城峠を越え河津浜に至る天城路を、修善寺から三〇分程行くと、天城峠への登り口嵯峨沢に至る。私たちの宿はそこだった。付近には、その旅館以外の民家は見当たらなかった。

狩野川をバックに広い前庭に面する和風の木造三階建の建物は、緑の木々に囲まれ周りに溶けこんでいた。

父が元気な時は、夏休み必ず一族郎党四家族で来るのが、二〇年ほど続いただろうか。祖父を囲んで夏休み、孫たちはプールで泳ぎ遊ぶのが例年行事だった。それが縁で、今でもこの温泉が気にいっているのだった。

この付近は、川端康成の『伊豆の踊子』の旧天城トンネル初め、井上靖の『猟銃』の舞台といわれている滑沢溪谷があるが、八〇才ともなると『踊り子の道』を歩いてたどるのはいささか躊躇されたので、名前につられて『出会い橋』に行ってみた。

天城の原生林を流れてきた本谷川と猫越川が、天城湯ヶ島温泉の中央で合流し狩野川となるが、合流する本谷川にかかる男橋と、猫越川にかかる女橋をそれぞれ男性は男橋を、女性は女橋をわたり、そこで偶然男女が出会うと、そのカップルは、運命の人になるとのいわれが書かれてあった。

私は家内と、「いまさら……」と笑いながら、手をつないで渡ってみた。

山海の珍味の夕食を終えると、ほろ酔い機嫌で家内と外に出してみた。宿の裏を流れる狩野川は、上流で水量が少ないのか、宿側半分は河原が露出していた。岩場の河原で誰かがタバコを吸っているのか、火が見えた。弱いライトに照らされ薄明りの河原に、浴衣のまま降りてみる。川は緩やかに流れていて、時折螢らしきものが飛んでいた。

空を見上げると、都会では見られない満天には、あまたの星がきらめいていた。

私は、久しぶりに昔覚えた星座を思い出していると、家内が

「星がわかるの？」と、冷やかすので、「北斗七星と北極星ぐらいはわかるさ」と、応えてみたものの、昔柄杓型の北斗七星から北極星を探す方法を思い出そうとしているもの、肝心の北斗七星がなかなか見つからなかった。

その私を見ていたのか、タバコを吸っていた男が近づいてくると、

「天文学に興味お持ちですか」と、丁寧に訊ねてきた。品の良い私と同年ぐらいの人だった。頭の髪は全くなかったが、もみあげからのびる白い髭は、顎から口の周りを覆い、綺麗に揃えられていた。その姿は、どこにでもいるような話好きな好々爺と云った感じだった。私があいまいな返事をする、彼はすぐ北斗七星と北

極星を指さして教えてくれた。

「昔の日本人は、星を眺めても想像力を働かして、星を柄杓型に結び付けて『北斗七星』などの星座として名付け、表現しようとは思わなかったですよ」と笑った。

私がお世辞気味に「詳しいのですね、何かこのようなお仕事をなさっていたのですか」と問うと、「いや、趣味です。今都会では見ることはできませんが、ここではよく見える。私などは、夜空を見あげると、星が星座の絵にあるように繋がって『オリオン座』『さそり座』などの形に見えるのですよ。概念って怖いものですね。一度星座として覚えるとそのような形に見えるのですから……」と、続けるとマニアックな話をしだした

「天文学は西洋でも東洋でも——日本は中国からに輸入ですが——古代政治に関与する実学だったのですが、東西で異なる点が一つあるのです。中国での天文学は、地上での異変のメッセージを読み取るものであり、新星など天の異変の記録が綿密に残されています。それに対して西洋では、天は普遍を象徴するものであったので、規則正しい星の運航が精密に測られ、それを乱す異変は天上の現象ではないと、無視される傾向があったようです。その結果、北極星を中心とする天体の規則性——必然性——を発見するのです。私の勝手な推定ですが、この事実はどうも偶然に対する西洋と東洋——日本——のスタンスの違いだと思うのです。西洋人は必然性にこだわる。例えば、アリストテレスは『必然的なものだけが有意で、真理は必然的なものにしか宿れない』と、偶然性は認めるものの原因が不明なだけだと述べています。どうも西洋人は偶然性を嫌っているように思いますが……」と云うと、照れくさそうな笑みを見せた。

翌朝私は、彼が『『偶然』と『必然』について、西洋と日本ではスタンスが違うようだ』と、述べたのに興味をいだいき、昨夜の老人に親しみを感じた。アドレスでも交換できたらと思い、特徴ある人なので容易にわかるだろうと、女将に尋ねたが彼女は「さあ、そのようなお泊りの方は、心当たりありませんが……」と、首を傾げた。

(二)

この老人の言葉——偶然に対するスタンスの違い——に興味を持ち、手始めに、『偶然は必然の一部である』と嘯く、ポール・オースターの『ムーン・パレス』を読んでみた。

『ムーン・パレス』は孤児マーコの物語だ。

母親が学生時代に産んだラブ・チャイルド——私生児——のマーコ・スタンリー・フォッグは、父親を知らされることなく、幼いころに母親を交通事故で失い孤児になり、母方の叔父ヴィクターによって育てられるが、コロンビア大学に在学中その唯一の血縁も失われてしまう。財産もないマーコは、ついに家賃を払えなくなりアパートを追い出され、セントラルパークでの浮浪者生活を余儀なくされが、友人ジンマーによって助けられる。

ジンマーのところで元気を回復したマーコは、社会復帰を目指して大学の学生課で見つけた住み込みの仕事に応募する。

仕事は、大金持ちの全盲の老人トマス・エフリングに本を読んで聞かせることと、散歩に同行して彼の目の役目を務めることだった。やがて、エフリングが自分の伝記を書く計画を打ち明け、彼の人生を語り始める。

若い時、エフリングは、ジュリアン・バーバーと言う名の画家だった。エリザベス・ウィーラーという金持ちの

娘と結婚したが、悪魔の手先のような不感症の女で、ついに一度も彼とベッドを共にしようとしなかった。そのような生活に飽きたエフリングは、西部行きを決心し、出かけようとするすると妻が泣き叫び止めようとし、一夜だけの交わりを許すが、彼は妻を残したまま西部に旅立った。

当時三三才だった彼は、西部の荒地へと旅をするが、放浪の末偶然見つけた洞窟に沢山の食料と財産を発見する。洞窟の持ち主のならず者グレシャム兄弟三人を撃ち殺し、彼たちの莫大な財産をも手に入れると、自分は新しい名前、トマス・エフリングとして新しい人生をはじめた。彼は西部から別人として脱出すると、ニューヨークに居を定めた。

彼が伝記を書かせたのにはわけがあった。実は置き去りにした妻は、彼の子を産んでいたのだった。エフリングは自分の死期を予測し、自分の伝記と財産を見知らぬ息子に渡すのをマーコに依頼して死んで行く。

マーコが見つけた彼の息子ソロモン・バーバーは、歴史学の教授で頭のはげた巨体で太っていた。マーコは依頼されたように伝記と遺産を彼に渡すと、自分の仕事は終わったと解釈していたが、まもなくニューヨークに彼が現れ滞在することで変わって行く。バーバーは、父エフリングが生活していた洞窟を探してみないかと提案するが、マーコは冗談だと思っていた。しかし、ほんとだと知ると車を買って二人は洞窟探しに出かけた。

バーバーの提案でマーコの母の墓によるが、墓地でバーバーは突然泣き出し、実はマーコの母親エミリー・フォッグはバーバーのかつての恋人で、自分がマーコの父親であることを明かすと、激昂したマーコの剣幕に興奮してつまずいたバーバーは、墓穴に落ち救出されるが、さまざまな病気を併発し亡くなってしまう。

マーコは、母の墓のそばにバーバーを埋葬し、今や祖父に当たるエフリングの洞窟探しに一人で出かけるが、情報をたどって探し当てたユタ州のその場所は、すでに人造湖レーク・パウエルとして水の底だった。

このような偶然としか思えない行為を、どのようにして必然だと云うのだろうか？

偶然とは主観的なものだ。受け止め方で違って来る。マーコの父親を慕う思慕が、バーバーが父親だと知った瞬間、彼は激しい情動にかられ、その情動が過去に投影されると、その過去が持ってなかった意味を持ち、エフリングとの出会い、伝記を書いたことなどが必然的行為と思えて、バーバーとの出会いが運命——必然——と考えたに違いない。

しかも、確かに、必然は偶然を内在して現れる。

例えば、生命の誕生において、男女のセックスから子供が生まれるのは必然——自然の法則——だが、どのような男女の組み合わせになるかは偶然の作用だ。更に、微視的に見ると精子と卵子が受精卵を作り、子供が生まれるのは必然だが、どのような卵子と精子の組み合わせになるかは偶然だ。

確かに、『偶然は必然の一部』かもしれないが、なぜ『偶然』を嫌うのかわからなかった。

しかし、このように偶然を否定する西欧思想の例は枚挙にいとまがない。

プラトンは、『饗宴』の中でアンドロギネスの話として、『人間は、原始の時代、男男、女女、男女の頭も二つ手足は四本の一体になった三種類だった。ところが、神が各々を切り離してしまっただけで現在の姿になるが、レズやホモ、男女の恋愛は、元の姿に戻りたいと云う必然性を示している』と考えているように思える。

また、スピノザは『エチカ』中で『ある問題が偶然と呼ばれるのは、我々の認識に欠陥があるからであって、

それ以外のいかなる理由によるものでもない』と言っている。

これはヨーロッパ人の知的伝統によると思われる。

『西欧二千年の哲学の歴史は、プラトン哲学の様々な注釈にすぎない』とは、ホワイト・ヘッドの有名な言葉だが、プラトンは、現実には我々が住んでいる世界は虚像で、別なところに真の世界があると述べている——『洞窟の比喩』——。

このような形而上学的なものの見方が、ヨーロッパ的観念論となり、『真理は必然的なものにしか宿らない』との考えになり、必然性はプラス、偶然性はマイナスとの考えが定着し、偶然性を認めたくない思想を生み出したようだ。

また、ヨーロッパ的合理主義は、世界はコスモスでカオスではなく、調和がとれており、その自然の法則を見出そうとする姿勢が、ニュートンの重力の発見やダーウインの進化論による自然の規則性の発見——必然性——の成果が、偶然性に対する拒絶反応となっていると思われる。

個人を重んじるヨーロッパ世界においては、自分の意志とは無関係におこる偶然的出来事——他者依存の出来事——は、否定したいのではないだろうか。

(三)

一方、日本人の『偶然と必然』に関するスタンスはどんなものだろうか。

偶然性を代表する例を思い浮かべた時、『盲亀浮木の譬え』——『雑阿含教』——を思い出した。

譬えは、大海の底に住む一匹の盲亀が、一〇〇年に一度大海に首を出す。その亀が、流れている穴の開いた一本の浮木の穴に、首を突っ込んだ姿で現れる可能性はあるのだろうか。生を受けるとは、この可能性のように珍しいこと——偶然——だと譬えで、生はそのような起こりがたい偶然によりもたらされたものなので、意味あるものとして生きなければならないと云う教えだ。このような偶然を、日本人は偶然として容易に受けいれているので、偶然に寛容だとは言える。

この『生』を、欧米人は錯綜する因果連鎖として、必然の結果として生まれてくると考えるであろう。

しかし、日本にも偶然はマイナスだと考えられる事柄もある。それは、無常観だ。

平家物語に代表される『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢のごとし……』に、その思想を見ることができる。

無常は、『諸行無常、生命あるものは全て消滅する儚いものである』との認識で、死は必然だが死の到来は偶然であると考え、生をいかに生きるべきかを説いている。

『いろは歌』は、この心境を最もよく表していると思う。

色は匂えど 散りぬるを
わが世たれぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて
浅き夢見じ 酔いもせず

ヨーロッパ的な立場に立つと、『無常はなぜなのか』と、原因を問いかけ救いを絶対神に求めるであろうが、日本人にはその原因を問い詰める気持ちはさらさらない。

日本人は、あっけなく散り行く桜を憐むが、そのあっけなさ故に美しいと賛美している。

『散ればこそ、いとど桜はめでたけれ、憂き世になにかひさしかるべき(在原業平)』

避けられない死を憐むが、『消滅』する時のいさぎよさを賛美している。

このように、日本人は無常との共生をはかり、この世に不滅のものはあるのかと問い、死を容として受け入れ、むしろあっけなさを賛美する『滅びの美学』をつくりあげ、偶然——死の到来——のマイナス面をプラスにしているのではないだろうか。

人間五十年 下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。

一度生を得て滅せぬ者のあるべきか

(四)

私は、このように『偶然と必然』に取りつかれていると、偶然インターネットで、暗殺された二人の大統領、リンカーンとケネディに関する不思議な記事を見つけた。

暗殺の経過は次のようだった。

◆ リンカーンは、南北戦争にほぼ勝利した一八六五年四月一四日、妻のメアリーと『われらアメリカのいとこ』を、フォード劇場二階のボックス席で観劇していた。戦争によるストレスを解消するためだった。その席に、突如現れたウイルクス・ブースに頭部を撃ち抜かれた。

ブースは、俳優だが南部連合支持者で、『リンカーンは独裁者になる』と、怖れた熱心な共和主義者だった。暗殺後二階から舞台に飛び降りて逃げるが、骨折しニュージャージー州で騎兵隊に追い詰められ、銃殺されるが最後に彼は苦しい息の下から、「母に私は、国のために戦い死んだと伝えてくれ」と、息絶えた。

◆ ケネディは、一九六三年一月二二日テキサス州ダラスで市内をパレード中、ライフルで狙撃され暗殺された。彼がダラスを訪れたのは、アフリカ系住民に差別的発言をしたことで、元々民主党の牙城であった南部諸州が、翌年行われる大統領選挙に反発していることにあった。初めシークレット・サービスは、オープンカーをやめ防弾の透明カバーをつけることを主張したが、市民との親しさを演出したいケネディは反対を押し切った。

一時五〇分、妻ジャクリーンとともに、前席にはコナリーテキサス州知事夫妻が乗りオープンのリンカーン・コンチネンタルでパレードは始まった。パレードはメイン・ストリートからヒューストン通りを左折し、エルム通りに入り、十二時三〇分には教科書倉庫の二〇メートル前に差し掛かる。沿道は歓迎の人々で埋まっていた。

後日判明したことだが、この倉庫の六階から三発の弾丸が発射された。一発目は大統領ののどに、二発目が右頭部を貫いた。車は猛スピードでバークランド病院にむかったが担当した医師は、「着いた時は、すでに我々のやることはなにもなかった」と、述べている。犯人のリー・ハーヴェイ・オズワルドは

逃走したがその日のうちに逮捕されたが、警察署から拘置所に移送される時、ジャック・ルビーに撃たれ裁判を受けることはなかった。

インターネットで見つけた記事は『リンカーンとケネディ〇〇年の怨念』と、云うもので記事は下記のようにだった。

宇宙には、人の運命をつかさどるジョーカーがいると云われている。

一九世紀のリンカーン大統領と二〇世紀のケネディの不慮の死には、次のような共通点が見られる。

- ① リンカーンが初めて下院議員に当選したのが一八四六年、ケネディが下院議員に当選したのは一九四六年。
- ② リンカーンは一八六〇年、ケネディは一九六〇年に大統領になった。
- ③ 両方とも金曜日に、妻の前で暗殺された。
- ④ リンカーンの副大統領で任期を引き継ぎ大統領になったのはジョンソン。
ケネディの副大統領で後継者も同じくジョンソン。
- ⑤ リンカーンの後継者アンデリュー・ジョンソンは一八〇八年生まれ。
ケネディの後継者リンド・ジョンソンは一九〇八年生まれ。
- ⑥ 暗殺者ブースとオズワルドはそれぞれ一八三九年と一九三九年生まれの南部人。
- ⑦ リンカーンはフォード劇場で、ケネディはフォード車で暗殺された
- ⑧ 暗殺犯はいずれも裁判にかかる前に殺されている。
- ⑨ リンカーンの秘書はケネディ、ケネディの秘書はリンカーン。
- ⑩ リンカーンは暗殺される一週間前メリーランド州モンローにいた。
ケネディは暗殺される一週間前マリリン・モンローと一緒にいた。

大統領の就任時期など、いくつかの事柄が一〇〇年のずれで一致することや、後継者名などの一致は偶然だろうか？

これらの一致は、何を語っているのか、全て偶然の一致と考えているのだろうか？

否、運命をつかさどるジョーカーはいるのだろうか？

(五)

露天風呂は、顔が外気の涼しさに触れられるので気持ちがよい。貼り付くようにぬめる温泉の快適さは、自宅のふろでは味わえない、何とも心地良いものだ。

自然の石を組み合わせ造られたこの露天風呂は、緑の樹木を背景に、川側は竹で作られた塀に目隠しされているが、狩野川の流れの音はのびやかに響いてくる。

私は、いま嵯峨沢温泉に浸かっていた。夜遅いせいか誰もいない。手足を十分に伸ばすと、お酒の酔い

が全身に回り気持ちがよかった。

空を見上げると、建物の屋根と樹木に遮られ一部しか見えないが、星が輝いていた。

（星が……）と思うと、以前星座の話から『偶然性』にのめり込んだのは、あの河原で会った老人の、『偶然に対する西洋と東洋のスタンスの違い』との、言葉がきっかけだったのを思い出した。

かの髯面のオタクっぽい老人を思い浮かべると、なにか親しみを感じた。

『スタンスの違い……』のような言葉が、単なる趣味だけで出てくるとは思えない。

温厚な話し方から覗く旺盛な好奇心が目に見れていて、ただ者ではないと思われた。

ふと、『星占い師』を思い浮かべてみた。

『星占い』は、誕生時に、太陽が黄道一二宮のどこの宮にあったかで、人の運命は決まると云う。そう思いだすと、老人が神秘的なものに見えてくる。

彼との出会いは、『偶然』だったのだろうか？

彼は、何ものだったのだろうか……。

まさか、ジョーカーでは？

◆文献

- * 『無常と偶然』 野内良三 1912年
- * 『偶然から読み解く日本文化』 野内良三 2010年
- * 『偶然と運命』 木田元
- * 『ムーン・パレス』 ポール・オースター
- * 『リンカーンとケネディー〇〇年の呪い』 Web
- * 『リンカーン大統領暗殺事件』 Wikipedia
- * 『ケネディ大統領暗殺事件』 Wikipedia

2016-2-15 原稿用紙 25枚